

まんまるだよ！ 3月号

雪解けの瀬音に誘われ
芽生える 命
春よ 来い 来い
来い 来い
来い 来い
去年忘れた分も 来い

春近く
哀しい記憶と
膨らむ期待
心の中まで
三寒四温

最近、五行歌にはまっている牛女

春が近づいてきました。3月3日「桃の節句」はまんまるのお誕生日。二〇〇九年にオープンして以来、試行錯誤の繰り返し、いまだにふらふら、よちよちと歩いているまんまるの木、これまで倒れずに何とか歩き続けて来られたのも、皆様の暖かい励ましのおかげと、感謝申し上げます。そんな皆様にお礼と感謝を込めて、3月4日「まんまる3周年記念コンサート&ミニパーティー」を行います。お忙しいとは存じますが、ぜひおいで下さい。

昨年は予想もしなかった震災で、何をしてよいかわからなくなってしまうた牛女ですが、結局毎日ごはんをつくってお客様を待つ日々が続き、それが案外素直に自分にはまってしまう、今やつぱり毎日田舎ごはんを作っています。

ついでに娘の有希も体に良い食にはまってしまう、たぐいま、黒ゴマやきなこ、豆乳など体の免疫力をあげる素材を使ったドリンクを考案中。3月からは、新たなオリジナルメニューを追加します。ぜひご賞味ください。

また、3月1日から始まる橋本紘二さんの写真展「復興への一年」の開催期間中、義援金黒豆入りコーヒーを提供させていただきますので、ぜひご協力ください。

橋本紘二写真展 3. 11大震災・原発災害の記録2 「復興への一年」

2011年3月11日、地震直後はまだ楽観視していた。ところが各地の被害状況が報道されるにつれ、みな愕然とした。世の中が一変してしまった。日本中がおろおろしていた「今もまだしている」。暗く沈んだ毎日の中で自分に何ができるか、みんな考えていた。そんな時に紘二さんの写真が頭に浮かんだ。

橋本紘二写真展「農仕事・四季の輝き」。まんまるのオープンニングを飾った展示だった。「農家の次男坊ゆえに農民になれず写真家になってしまった」という紘二さん。美しい山里の季節なら、撮れる写真家はたくさんいるが、紘二さんが撮るのは人の手と心が織り成す農の営みから生まれる美しさ。それは農仕事の何たるかを知っているから撮れる。私は紘二さんの写真が好きだ。彼にしか撮れない人と自然の関わり的美しさ、一枚の写真のなから、なぜか人の心の中にある自然な強さや優しさが伝わってくる。同時にそれはシャッターをきる彼の優しさのような気もする。

震災後、自分の気持ちに淀んでしまった。だから紘二さんの写真をまんまるに展示したかった。失ったものの大きさ、どこを目指して戻っていく、あるいは進んでいくのか、そんなことを考えるために多くの人に彼の写真を見て欲しかったのだ。思い立ったら何でもたつてもいられず、紘二さんの携帯に電話をした。「えっ何？」半ばいらだつたような声が返ってきた。その時三陸の被害に隠れて大きく報道されていなかったが、長野県の栄村が震度6の被災をし、当然峠一つ越えた新潟県十日町に住む紘二さんも被災していた。私が電話したとき、紘二さんは栄村で陥没した道路や倒壊した家屋を目の当たりにしていたときだった。「道路が落ちこちちゃってるんだよ。今そんなこと考えられない」。紘二さんの言葉に私はあわてて電話を切った。なんて独りよがりのお調子者だろうと、自分が恥ずかしくて仕方なかった。

それからしばらくして紘二さんから電話がかかってきた。「震災の写真展をやりたい」。もちろん引き受けた。そして5月に栄村と三陸を、続けて6月に福島の写真展示した。ランドセルを持って瓦礫の中にたたくむ女性の背中、牛の乳を搾る農家、こういう写真にいい写真だなごというのは不謹慎なだけけれど、被写体の心が伝わってくる写真だった。報道写真は人の感動を煽るためのものではない。まして人を傷つけるものであつてはならない。それでも誰か伝える人は必要だろうと思う。どう真摯にかかわっているのか、カメラマンの人間性が問われる。その意味で紘二さんはうらぎらなかつた。

3月1日からの「復興への一年」ぜひみなさんにご覧いただきたいと思う。



スペース&ギャラリー まんまるの木

〒154-0001 世田谷区池尻2-37-15
☎ 03-5787-8793
Fax 03-5787-8794

2月9日、まんまるの木で「タオル帽子講習会」が行われました。講師は世田谷トラスト街づくり大学の卒業生の皆さん。お母さんも安心してできるようにと、託児もつけていただきました。

実はこの帽子、岩手県のホスピスさんが毛髪をなくされた方のために考案したもので、タオル一枚でつくれます。講師の一人から牛女がプレゼントされ、厨房で被っていたら、とつても気に入ってしまう、毎日手放すことができません。そこで、洗い替えが欲しいと思ひ、講習会をお願いしました。

当日は自分のためはもちろんお子様やお友達のためにとたくさんの方が参加してくださり、大盛況。終了後はそれぞれ出来上がった帽子を被って大満足の様子。ほんとうに今日は楽しかったと皆さんニコニコ笑顔でした。

でも、肝心の牛女が忙しくて参加できなかった。もう一度講習会をやっていただけのことになりました。今回参加できなかった方、もう一度復習したい方、ぜひごいっしょにどうぞ！



第2回 タオル帽子講習会 3月24日(土) 14:00~

持ち物
参加費 700円
タオル(30×70cmくらい)
糸・針・裁ちばさみ
ものさし(メジャー)

一月は、「徒然三人展&震災義援金手作りバザー」のダブル企画にご協力ありがとうございました。

バザーの総売り上げ77,340円。材料費還元9,888円を差し引き67,452円を「東日本大震災復興NPO支援・全国プロジェクト」を通じて、支援金とさせていただきます。うち15,000は、期間終了後残った品を『東邦ホールディングス』様に一括購入していただいた分です。この場を借りて御礼申し上げます。

『徒然三人展』のほうは、娘有希の辰の絵、富田浩二さん・吉田健治さんの写真、下平紀代子さんの文章が加わり、「徒然七人展」となりました。じっくりご覧いただけなかった方のために、一部ご紹介いたします。

☆バトンタッチを受けて 東京スカイツリー

いわきやすお

「先輩、ごめんなすつて、後は、あつしにおまかせを」
いなせな気風を見せながらスカイツリーが出番を待っている。東京タワーの完成から54年を経て、333メートルだった東京のシンボルも大きく成長した。いままでは芝の増上寺だったのが、これからは隅田川を、浅草のまちを眼下に見る。スカイツリーは青空によく映える。634メートルのつぼさんは、空に向かってぐいと突っ張りをしている。言問橋から眺めると、伊勢物語の東下りがよみがえってくる。電車で業平橋駅近くを通りかかると、車窓から美しい容姿を確認することが出来る。

「きみはいいよな、夏の花火大会は一等席から見物できるのだから」
うらやましくもなった。風に乗って粹な木遣り唄が聞こえてきそうだ。東京タワーからバトンタッチを受けて、スカイツリーがまもなくお江戸の主役になる。

タワーには癒され、はげまされ、ぬくもりをもらった。そして、タワーは高度成長を牽引してきた。今度はきみがみんなを引つ張る番だ。見る人たちにいい思い出をあげてください。そう、子どもたち、おとうさん、おかあさん、おじいちゃん、おばあちゃんにも。きみが50歳になったとき、どんな東京になつていよう。もしかしたら、ほかの場所にきみの2世が誕生しているかも知れない。さあ、きみのライフワークが始まる。東京の名所になるといいね。上空からたくさんさんの希望と夢を送ってほしい。

☆歌舞伎座に寄せて

下平紀代子

「いよつつ！ つ 待つてましたっ！」

「高砂屋っ」「京屋っ！」「松島屋っ！ー！」

大向こうから、一段と大きな掛け声がかかった一昨年三月初日の歌舞伎座第二部。「菅原伝授手習鑑」筆法伝授の菅丞相・仁左衛門丈が纏う高潔なオーラといい、「弁天娘女男白波」の弁天小僧菊之助・菊五郎丈からあふれ出る天下一品の艶つぼさといい、花道にずらりと並ぶ白浪五人男の七五調の名口上を聞くにいたつてはもううつとりと聞き流すしかない至福のときだった。

一年にわたる「歌舞伎座さよなら公演」は「絶対安全歌舞伎座」と勝手に呼んでいたほど、世話物、時代物、舞踊すべてにわたり、演目も役者もそろって豪華なもので、たまたまこの時期に建て替えによる企画で斯様なことになったのも幸いといわねばなるまい。

振り返ってみれば、歌舞伎座にはもう四半世紀は通つたことになる。そもそもが、着物を着て歌舞伎座に行きたいという不純？な動機で始めたのが、いつしかすっかり夢中になつて、歌舞伎会の特別会員にもなり、当時は今ほど優先予約枠もなかったので必死で電話をかけてチケットを取つたものだった。毎月、席幅の狭い三階席に陣取り、幕間には茶屋で予約しておいたおでん定食をいただく。年に二度ほどは奮発して棧敷を取るということが半ば日常化していた。ときには演目に合わせて着物を選んだりして、そんなときは特に、銀座四丁目から三原橋を渡る頃には、ドキドキソワソワした足取りで歌舞伎座に向かったことが懐かしく思い出される。

その歌舞伎座もとうに取り壊されて、先日、演舞場からの帰りに東銀座を通つたら、当然だがあの仰々しい御殿のような建物は影も形もなく、ぐるりとブルーシートに囲まれた工事現場と変わっていた。そんなときに小塚秀忠さんの閉場間際の歌舞伎座のスケッチを拝見した。場内の赤い絨毯、壁一面に飾られた名画の数々、豪華な緞帳、現代人には少々狭かった座席、そして名優が駆けた花道や華麗なる光に包まれた舞台の記憶が、目の前にはつと広がった。新生歌舞伎座のオープンも待ち遠しいが、あの独特の歌舞伎座のおいさを私はきつと忘れないだろう。

1月「徒然三人展」より

